

1 はじめに

1.1 研究の動機と経過

本校は、平成 8 年度より 3 年間、文部省（現文部科学省）の研究開発学校指定を受け、小学校英語活動のカリキュラム開発を中核に、教材開発・授業実践に取り組み、一定の成果を上げてきた。しかし、一方で、各学年年間 100 時間を超える実践を通して、

(1)教材開発や教具作成、さらに、ALTとの打ち合わせ等に要する多くの時間をどのように確保するか。

(2)指導方法を見直し、カリキュラムに基づく指導と児童の持つニーズをどのように関連付けていくか。

(3)身に付けた英語を生かす場面をどのように設定するか。

等の解決を迫られる多くの課題にも直面した。

そこで、平成 12 年度を初年度とし、これまでの英語活動を見直し、新学習指導要領に基づく総合的な学習の時間における英語活動の新しい指導方法の開発・実践に着手した。12 年度は、主に「目指す子供の姿」及び英語活動の方向性について検討を加えた。

さらに、「英語嫌いをつくらない」「楽しく英語を身に付けさせる」を合言葉に、新たな視点に立ち英語活動を構築することを確認した。

1.2 構想の視点

新たな英語活動の構想を実現するために、次の 6 つの視点を全教職員で共通理解し、取り組むこととした。

(1)国際理解(教育)の単元と関連付けて構成する英語活動を創造するという視点

(2)児童が使ってみたいと考える英語を素材に、「調べ学習」を取り入れた学習過程を創造するという視点

(3)児童が英語を楽しみながら、身に付けることのできる B-SLIM 理論を採用し、開発した教材と指導方法の共有化を目指すという視点

(4)「English immersion classroom」に可能な限り近づけた英語活動室を作り、学習環境を整えることで児童の英語活動に対する意欲を高めるという視点

(5)コミュニケーション・イングリッシュを効率よく進めるための様々な形態の TT(ティームティーチング)を実施するという視点(指導の中心は HRT という考え方も含めて)

(6)「調べ学習」を支える「ノングレード・カリキュラム」(題材一覧)編成し、系統的な指導を支える「スタディーメモリアル」を 6 年間継続して作成するという視点

2 英語活動の指導方針と研究の目的及び研究の方法

2.1 指導方針

本校では、学校教育の中で児童に求められている「生きる力」を「やりぬく力」「かかわる力」「あらわす力」の3つの力で育まれていくものと考え、「日章小学校の目指す子供の姿」を設定した。さらに、「総合的な学習で目指す子供の姿」「英語活動で目指す子供の姿」(表1)を設定した。また、学年毎に、英語活動の指標(表2)・評価規準を設定し、指導に繋いでいる。

表 1

<p>・英語活動で目指す子供の姿</p> <p>人と楽しくかかわりながら、英語活動に進んで取り組む子供</p> <p>○やりぬく力・・・自分から進んで英語にふれたり、使ったりすることができる。</p> <p>○かかわる力・・・ALT,友達等と積極的にかかわり、英語で交流できる。</p> <p>○あらわす力・・・自分の思いや表したいことを簡単な英語で表現することができる。</p>
--

表 2

・本校英語活動の指標		
低学年	中学年	高学年
○英語にふれる (歌やゲームで)	○英語に慣れる (挨拶や単語で)	○英語で表す (簡単な日常会話や単語)

2.2 研究の目的

前述の研究の構想を受け、本研究の目的を以下の3点に定めた。

- (1) 楽しく、身に付く英語活動を展開するために、ESLの教授モデルであるB-SLIMを導入したが、目指す子供の姿を実現できているかどうかを実践を通して検証する。
- (2) 英語活動を支えるノングレードカリキュラム及び「調べ学習」を位置付けた英語活動の学習過程が適切であったかを実践を通して検証する。
- (3) B-SLIMのOutputを国際理解(教育)の単元とリンクさせることで、児童の活動意欲を高めることができたかを実践を通して検証する。

2.3 研究の方法

本校では、研究に取り組む体制として、平成2年度より、

- 実践研究を通して子供を変える
- 授業研究を通して互いに学び合う共同実践研究

○教職員一人一人が推進役となる全校体制

この3点を研究体制の基底にすえ、前述の研究の目的を検証するために、次にあげる研究の場を設定した。

- (1) 日常実践を積み上げる英語活動（実践の蓄積の場）
- (2) 授業分析を伴う授業研究（検証の場）

また、1活動時間（45分・60分・90分及びモジュール・ショート＝15分を活動内容によって使い分けをしている。）の分析・研究にとどまらず、単元全体の構成や英語活動と国際理解教育との関連を検証することも実践した。

さらに、実践的な授業分析のための方法として、

- (1) 授業中のチェック・シート（参観者用）及び、授業後のセルフチェック・シート（指導者用）の活用
- (2) 児童の自己評価カード・相互評価（英語活動の最後に位置付けている）のチェックの活用を進めている。

授業研究（参観・分析）及び単元構成を分析する視点として、次の3点を共通理解し、実践に当たった。

- (1) 「英語活動で目指す子供の姿」を視点として
- (2) 本校で求める「3つの力」を視点として
- (3) B-SLIM の Evaluation 及び Reflection を視点として

3 研究の実際

3.1 B-SLIM の導入

ESL (English as a second language) 指導法の基礎理論である B-SLIM は、カナダ・アルバータ州立大学 Olenka Bilash 博士が提唱する教授モデルである。Bilash's Second Language Instructional Model（モデル図は資料1参照）の頭文字をとり、B-SLIM と名付けている。平成13年度よりこの考え方を採用し、全教職員で共通理解し、教材やアクティビティーの開発、及び指導方法の改善に着手している。

平成14年度は、B-SLIM を基盤にした学習過程を創造し、実践に繋いだ。また、平成15年度は、学習過程における効果的な Input・Intake の構成や方法、Output の在り方を実践を通して検証し、確立することができた。

B-SLIM を採用した経緯は次の4点である

- (1) 指導方法を共有化することで、共通の視点で授業研究や授業分析を行うことが可能となる。
- (2) これまでの ALT を中心とした授業構成から脱皮し、ALT との役割分担を明確にし、学級担任が中心の英語活動を創造することが可能となる。
- (3) B-SLIM は、スモールステップでアクティビティーを構成し、フィードバックを位置付けた指導理論であり、児童にとって言語材料を無理なく身に付けさせることができる

学習過程に、B-SLIMのInput,Intake,Output,Evaluation(Reflection)を位置付け活動を構成している。通常、取り扱う言語材料とActivityの内容・配列が替わることはあるものの、基本的な学習過程については全学年同一で実施している。なお、実施に当たっては、次の点に配慮した。

(1)低学年については、Inputの段階に十分時間をかけ、なかでもListeningには、多くの時間を割くようにした。

(2)児童の「かかわる力」を育むことをねらいに、全学年とも、Intakeの最後の段階でpair activityを実施した。

(3)新出の言語材料(新出単語)は、可能な限りその時間内で身に付けさせることを目指した。一方、文については、多様なactivityの中に繰り返し取り入れる工夫をし、無理なく身に付けることができるように配慮した。

(4)Outputについては、1活動時間の中で、位置付けることが可能な場合に限り実施した。(Outputを実施しない英語活動もある。)

3.1.2 INPUT 段階と INTAKE 段階の重視

本校では、今年度InputとIntakeの段階を特に重視し、実践に繋いでいる。Inputの段階では、次の6点に配慮し実践を進めた。

(1)using visual : 視覚に働きかける教材を児童に提示する。

(2)repetition : 繰り返すことで獲得の手助けをする。

(3)same order : この段階では、覚える順番を変えずに進める。(Slow learnersが混乱を起こさないように配慮する。)

(4)modeling : 説明の後、モデルを提示し理解を助ける。

(5)movement : 記憶を助けるための工夫として、体の動き(動作)を取り入れる。

(6)rhythm : リズムは記憶の助けとなるため、チャンツを多く取り入れる工夫をする。

上記の基本原則を共通理解したうえで行うInputは、どの指導者も大差なく指導を進めることができる。過日、2学年合同で英語活動を実施し、通常とは異なる指導者のもとであっても、児童は違和感なく参加していた。

このように、児童の心理的な側面にも配慮した指導を進めることが大切である。

また、Intakeの段階では、目標に対して少しずつ練習を繰り返しながら、難易度を高めていくことを心がけ、Activityを構成している。B-SLIMでは、この段階をgetting it(児童が教師と共に試行錯誤しながら身に付けていく段階)とusing it(児童が互いにかかわり、慣れ親しむ段階)に分けていることから、流れの途中で必要に応じてフィードバックしながら、スモールステップで構成している。

Intakeの段階では、次の6点に配慮し実践を進めた。

(1) Practice 開発したアクティビティーを効果的に配列し、児童が楽しさを感じる中で目標に近づくことができるようにする。

(2) Breaking learning into small chunks 一度に多くのことを詰め込みすぎないように、学ぶことを小さなまとまりにする。

(3) Activities are structured for success アクティビティーを通して児童が成就感を持つことができるように計画する。

(4) Psychologically safe 児童が安心して自分の思いを表出できる(英語を安心して話せる)雰囲気づくりをする。

(5) Learning style (form) 全体・グループ・ペア・個人で行う活動を目標に合わせ、多様な学習形態を効果的に組み合わせる。

(6) support 児童に支援を行う際に、次の4点を特に配慮した。

- ・ slow learners への確かなかわり(個別の支援)
- ・ praise (賞賛) encouragement (励まし)
- ・ guidance (指導)
- ・ personalized positive feedback (個々に応じた積極的なフィードバック)

さらに、B-SLIMでは、アクティビティーを開発する際に、8要素(8 intelligences)に目を向けることを奨励している。本校では、8要素の中の Visual, Kinesthetic, Interpersonal の3点を特に重視しながら効果的に配列し、組み合わせることで、児童にとって楽しい中で、バランスのとれた英語を身に付けることができると考え実践した。(表4)

表4

8 intelligences		Activity の構成チェックリスト							
		8 intelligences の配列 (*今年度重視)							
8 intelligences		1	2	3	4	5	6	7	8
(1) Visual (右記リスト 1)	<i>Activity</i>	*	*			*			
(2) Kinesthetic (2)	Go to	○	○		○	○			
(3) Musical (3)	Point to	○	○		○		○		○
(4) Logical-mathematical (4)	Card game	○	○			○	○	○	
(5) Interpersonal (5)	Relay game	○	○			○	○	○	○
(6) Intrapersonal (6)	Clap the point	○	○	○	○	○	○		○
(7) Linguistic (7)	○○○ basket		○		○	○	○		○
(8) Naturalistic (8)	Touch the base	○	○		○	○	○		○
	Free kick		○		○	○	○	○	○
								

チェックリストの見方
○・・・Activityに8 intelligencesそれぞれの要素が入っていることを示す

本校では listening (hearing) と speaking を英語活動の両輪として活動を進めているが、8 intelligences に視点をあて Intake

の段階を構成することで、児童の心理的な側面にも目を向けることができるようになった。

3.2 TT(ティームティーチング)の実際

1時間の英語活動の中で、多様な指導の形態を取り、役割分担を明確にして活動を進めている。HRT(学級担任)が指導の中心となり、JET(日本人英語教師)、ALT(英語指導助手)がそれを支援することを基本原則にTTを組んでいる。

本校でのTTの実施形態及び実施状況は以下の通りである。(総英語時間数に占める割合)

- (1)HRTが単独で行う英語活動(約10%)
- (2)HRTとALTがTTで行う英語活動(約50%)
- (3)HRTとJETがTTで行う英語活動(約30%)
- (4)HRTとALT・JETがTTで行う英語活動(約10%)

ただ近年ALTの確保(旭川市では、教育委員会がALT派遣事業の一環として小学校の申請に応じて派遣する形態をとっている)が難しくなってきたことから、平成14～15年度には、VET(ボランティア英語教師)や旭川市役所国際交流課交流員(アメリカ人)を通算20回程度招き、指導の充実を図った。

HRTは、英語活動全体の流れを掌握すると共に、児童の理解度のチェックや個別支援、更に活動の進行・指示を行っている。ALTやJETは、アクティビティの進行、モデルの提示、native soundの提供を行っている。

英語活動においては、可能な限り英語で指示を出すことをHRTの努力目標にはしているが、中には英語が苦手なHRTもいる。その部分をALTやJETが補いながら、指導を進めている。その結果、HRTとALTの打ち合わせの時間が大幅に減り、約2年を経た現在では、FAXやEメールによる打ち合わせが増え、互いの負担を軽減することができた。また、学習過程に沿った実践を繰り返すことで、HRT・ALT共にB-SLIMに対する理解も深まり、充実した英語活動を展開することができた。

3.3 国際理解教育とリンクさせた英語活動

本校が英語活動の最後に実施している自己評価を総合すると、常時90%以上の児童が「楽しかった。また英語をやりたい。」「よくわかった。英語を使うことができた。」「友達やALTと積極的にかかわることができた。」という評価をしている。高学年の英語活動の難しさを指摘する声を多く耳にするが、本校では、高学年も含めて、児童の活動意欲や積極的な取組や態度が持続する理由として、次の2点を挙げることができる。

3.3.1 国際理解の単元とリンクしたストーリー性のある英語活動の展開

学んだ英語をどの場面で使うのかを明確にし、単元の中で生かされることで、児童は英語活動に意欲を持って取り組むようになる。

そこで、低学年では、言語材料と学校生活を結びつけ、毎日の学校生活の様々な場面で使うことができるように構成した。

また、中・高学年では、国際理解の単元とリンクさせ、どの場面で身に付けた英語を使うことができるのかを明確にして、児童個々のニーズ(課題)を学級全体のニーズ(課題)へと高めていった。

(1)低学年の実践例

- ・「学習のはじめのあいさつを英語で！」(1年)

○取り上げた言語材料

～ Now start (finish) the lesson. Japanese, math, music, PE. art and craft, ～

- ・「朝の健康観察を英語でやってみよう」(2年)

○取り上げた言語材料

～ How are you today? I'm fine. I have a cough (fever, headache, stomachache, sore throat, runny nose) ～

両学年とも実践後約10ヶ月が経過しているが、現在も教室からは、元気のよい英語が響いてきている。

(2)中・高学年の実践例

- ・「姉妹都市・友好都市の人と交流しよう」(4年)

姉妹都市や友好都市のくらしや文化、食べ物等を調べていく中で、本市に在住する両都市の方々と交流の機会を設定した。交流の際に、児童が本市の観光名所や公共施設を案内するという設定で、英語活動を構成した。英語活動では、14カ所の施設等の他、道案内の仕方、行き先がわからなくて困っている人への声のかけ方等についての学習を深めた。

○取り上げた言語材料

～ city hall, art museum, library, bank, etc. May I help you?

Where do you want to go? go straight, go back, turn right, turn left etc. ～

- ・「フレンドシップパーティーに参加しよう」(6年)

自分たちの課題を解決することの他に、学校にゲストティーチャーとして来てくれる方を探すことも目的の一つとして、旭川市国際交流委員会主催の上記パーティーに学級全員で参加することにした。旭川市在住の外国人の方と英語で交流することにとどまらず、ゲストティーチャーとして来校を要請する表現や自分たちがどのような学習を進めているのかを説明する表現等を学習した。

○取り上げた言語材料

～ Will (Would) you come to ~. I would like you to ~

I'm studying about ~I would like to know (listen, see)~

単に英語活動を行うだけでは、児童の英語に対する期待や英語活動で高められた意欲が時間の経過と共に消失してしまいがちである。国際理解の単元とリンクさせたり、日常生活で英語を使う場面を設定したりすることで、児童の意欲や課題意識の高まりを持続させることができた。

3.3.2 OUTPUT の充実

本校では、Output の場を設定できる時に限り、国際理解の単元や英語活動の終わりの段階に位置付けている。そのため、児童は、「この場面で、この表現を使って交流したい。」という見通しや期待を持ち続けながら、英語活動に取り組むことが可能になった。Output を意図的に組み立てることにより、英語を積極的に身に付けようとする児童の意欲や態度が高められていくことを実践の中で明確にすることができた。

また、Output の場面で、英語を使って交流できたり、その英語が認められたりしたとき（賞賛されたりしたとき）に、児童はそれまでの取組に自信を持ち、もう一段ステップアップした意欲で、次の活動に向かうことも同時に確認することができた。

○本年度の実践例

- (1)本市国際交流委員会が主催する「国際交流まつり・フレンドシップパーティー・留学生との交流会」等に学級全員で参加した。（5～7月：5・6年）
- (2)外国の文化や国の様子について学習するために外国人のゲストティーチャを教室に招き、その際に交流集会を行った。（6～10月：3～6年）
- (3)学習発表会において英語劇「ももたろう・うらしまたろう」を上演した。（9月：5・6年）
- (4)雪祭りや国際氷像コンクールのために旭川市に来ている外国人へのインタビューを行った。（2月：4年）
- (5)外国人学校視察訪問に合わせて交流の機会をもった。（本年度3回：3～6年）

3.4 英語活動アンケート（自己評価）の結果から

英語指導方法の改善及び児童の主体的な英語活動が展開されているかどうかを評価するために、抽出学年を決め、英語活動終了後に自己評価を含めた英語活動アンケートを実施した。結果の一部及び本校以外で行った英語活動アンケートの結果は下記の通りである。（表5）

資料の蓄積や分析等、充分とは言えないものの、これらの結果から次の4点を考察することができる。

(1)英語活動の時間を確保し，全学年共通の指導方法で継続的に取り組むことで，児童は活動の流れを把握することができ，安心した中で英語に取り組み，積極的に活動する。

(2)この指導方法を取り入れることで，本校が目指す「英語嫌いをつくりたくない」「楽しく英語に取り組む」ことが，実現に近づいている。

(3)B-SLIM理論に基づき，適切なフィードバックとスモールステップをIntakeの段階に位置付けることで，slow learnersの理解を助け，児童が「楽しく英語を身に付ける」ことにつながっている。

(4)自己評価項目の充実を図り，更に多くのデータの蓄積をもとに評価や分析を進め，英語活動にどのように生かしていくのかを明確にすることが今後の課題である。

表 5

自己評価の集計結果より

アンケート項目 (この項に関連するもののみ)

英語活動に楽しく取り組むことができましたか。
 今日の課題・活動を振り返って，英語で言えるようになったことがふえましたか。
 またチャンスがあったら，英語を使ってみたり，英語を使ったゲームをしてみたいですか。
 自己評価は3段階で行った。A:できた(そう思う・ふえた) B:少しできた(少し思う・少しふえた)
 C:できなかった(かわらない)・思わない)

○ 本校での実施結果 (数字は%)

日章小学校 2年
(2002.9～2003.3…5回の平均)

	A	B	C
	86	14	0
	93	7	0
	93	7	0

日章小学校 4年
(2003.5～2003.9…7回の平均)

	A	B	C
	95	5	0
	95	5	0
	90	10	0

○ 他校での実施結果

旭川市T小学校 5年 (2003.7)
 ・年間3～5時間実施
 ・今年度初めての英語活動
 ・B-SLIMによる英語活動は第1回目

	A	B	C
	90	10	0
	40	54	6
	86	8	6

旭川市S小学校 6年 (2003.7)
 ・年間10時間実施
 ・今年度4回目の英語活動
 ・B-SLIMによる英語活動は第4回目

	A	B	C
	91	9	0
	64	30	6
	79	21	0

(2003.9.5 北海道英語教育研究大会において本校が研究発表した資料より)

3.5 主体的な学びに繋ぐ「調べ学習」とノングレードカリキュラムの編成

研究開発校の3年間は，年間指導計画・月別指導計

画が学年毎に編成され，それに基づいた英語活動が展開された。

しかしながら，総合的な学習の時間の「ねらい」を達成し，本校の「目指す子供の姿」を実現するためには，これまでのカリキュラムに従って『教え込む英語活動』から，児童が学びたいと考える英語を基に『主体的にかかわることのできる英語活動』へ指導の在り方を転換していく必要性を感じた。

それを具体化するために，「調べ学習」を学習過程（単元の指導計画にも）に位置付け，さらにその「調べ学習」を支えるために，「ノングレードカリキュラム」を編成した。

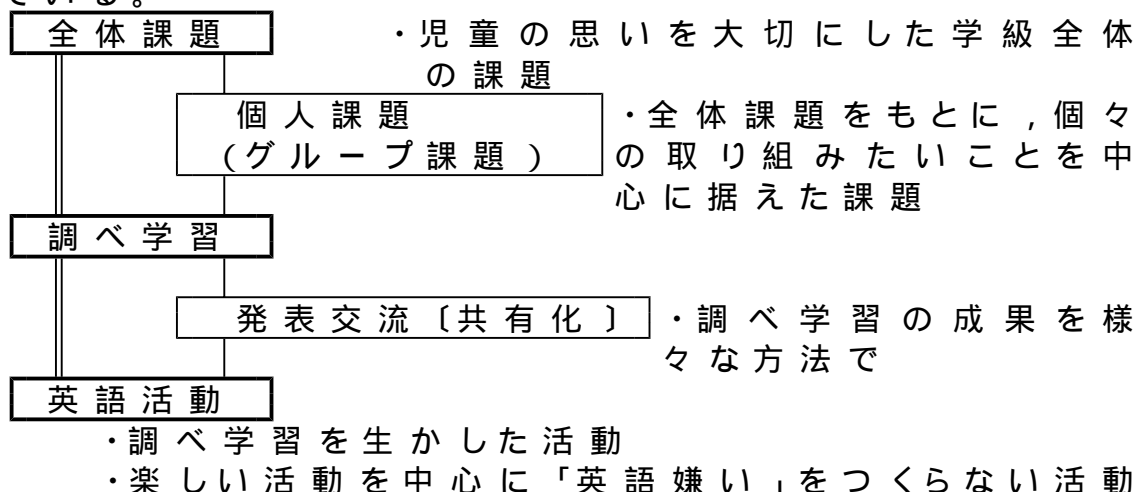
3.5.1 「調べ学習」の考え方

本校では，総合的な学習の時間の単元を構成する際に，問題解決的な学習の流れを可能な限り採るようにしている。英語活動で「調べ学習」を位置付けたのは，問題解決的な学習の流れに少しでも近づけることで，児童の主体性や英語活動に向かう意欲を高めていきたいという願いからである。

調べ学習を行う際に，次の2点を共に満たす必要があると考えている。

- | |
|--------------------------|
| (1) 子供たちにとって調べたい内容であること |
| (2) 子供たちが調べる方法を身に付けていること |

英語活動に至る調べ学習の流れは，次のようになっている。



3.5.2 「調べ学習」の実際（実践例）

3年生「英語を使ってみよう」の単元では，「調べる楽しさと調べ方を高める」ことをねらいに調べ学習を進め

た。この単元で全体課題となったのは、次の通りである。

- ・朝の会などで使うあいさつの仕方や曜日・天気等
- ・算数で習った数字（1～12までは、1年時に履修）
- ・図工で使う色
- ・教室にあるもの（机・イス・窓・黒板等）
- ・給食のおぼんチェック……

これらの課題をもとに、児童は個々に自分の使ってみたい言葉を見つけ出し、「英語のことば 調べてみたよカード」に記入し、中には30枚以上のカードを作り上げてきた児童もいた。調べ方も多岐に渡り、調べ学習に向かう意欲の高まりを感じることができた。

児童の調べてきた方法は、次の通りである。

- ・家の人に聞いた。 ・本で調べた
- ・英語の先生(ALT)に聞きに行った
- ・お友達の外国の人に教えてもらった
- ・国際交流まつり(旭川市の行事)に行って外国人に聞いた
- ・市立図書館で調べた

このようにして、児童が「英語活動で使ってみたい」と考える言葉や言い方を英語活動の学習過程の中に位置付け、活用している。

本時の課題を確認した後に、調べ学習の交流・発表の時間を設定している。調べカードをもとに発表し、その中から、取り上げる言語事項等をHRTと児童が話し合い、決定していくのである。

調べ学習を生かすことのできる英語活動の流れを創り出すことが、調べ学習の質や意欲を高め、さらに、児童の課題意識を持続させ、主体的な活動を生み出すことが実践を通して確かめることができた。

3.5.3 ノングレイドカリキュラムの編成

児童が使いたい英語を言語材料にして英語活動を進めるためには、月別・学年別の指導計画では、弾力的で柔軟な対応ができなくなることから、本校ではノングレイドカリキュラムを編成することとした。

ノングレイドカリキュラムとは、研究開発校の3年間を含め、平成4年度から取り組んできた英語活動の実践・授業記録・研究集録等から言語材料を全て洗い出し、それらを20題材・2コース（Basic course・Advanced course）の計40ユニットに編成し直したものである。（表6）

- これにより，
- (1)児童のニーズに基づく英語活動
 - (2)国際理解の単元とリンクさせた英語活動
 - (3)日常の学校生活に生かすことのできる英語活動
- を実践することが容易になった。

現在では，教材開発の深まりや単元構成の広がりを受け，新たな言語材料が追加され，ノングレードカリキュラムは，24 題材・計 48 ユニットにふくらんできている。

また，どの学年の時にどの題材に取り組んだのかがわかるように，英語活動実施後，「スタディメモリアル」に記録し，年度末に引き継ぎ系統的に指導ができるように配慮している。(表 6)

本校では，各学年年間 15 ～ 20 時間を英語活動に充てている。(3 ～ 6 学年は総合的な学習の時間，1 ～ 2 学年は，余剰時間を活用し教育課程外活動として位置付けている)

1 ユニットの 2 時間かけて指導することを基本に据え，40 ユニットの指導するのに 80 時間を必要とする。本校では，6 年間で，90 ～ 120 時間の英語活動を確保できることから，ノングレードカリキュラムの言語材料等を指導するには，十分な時間が確保可能である。

表 6

題材・言語材料一覧表 (ノングレードカリキュラム)

	greeting	Self-introduction	weather
B	Good morning	Hello.	cold hot warm
A	Good afternoon	My name is ~	cool rainy cloudy
S	Good-bye	I'm ~.	sunny fine
I	Hi. Hello	How do you do?	
C	See you	I'm in the ~ grade.	How is the weather today?
	Thank you	My nickname is ~.	It's ~.
	You are welcome		
	Nice to meet you		
A	How are you?	I'm eight	windy snowing
D	I'm fine thank you	How old are you?	foggy
V	I'm sleepy	Where do you live?	
A	I'm sick	I live in Asahikawa.	How is the weather in (place) ?
N	I have a cough	What's your name?	
C	(headache fever	What ~ do you like?	
E	stomachache	I like ~.	
D	runny nose)		
	Body parts	animal	shopping

スタディメモリアル B

題材	第 1 学年	第 2 学年
	○	
		○
	○	
		○
		○

点線より上が Basic course，
下が Advanced course.
実施後○印をつける
スタディメモリアル Aは，年間を見通した計画を記入する。
スタディメモリアル Bは，実施後，記録する

上記以外の題材は以下の通りである。

class/school	month/season	days of the week	color
counting numbers / time	sports	face	adjective
gesture /Verb	place	direction / guide	food
culture	Asahikawa		

(追加) ○ Hokkaido ○ sightseeing ○ gesture ○ school area

ノングレードカリキュラムに基づいて実践を進めるに

あたり、次の4点に配慮している。

- (1)児童にとって負担がかからない活動にするために、1・2年生は Basic course を中心に活動を展開する。
- (2)配当時間は、弾力的に扱っても良いものとする。
- (3)文字指導は原則的に行わない。
- (4)hearing (listening), speaking を中心に活動を構成し writing, reading については、取り扱わない。

3.6 その他（児童の意欲を育む英語活動の基盤づくり）

(1) English immersion classroom

英語活動を行う教室の環境整備も大切である。本校では、「ななかまどルーム」（英語活動室）の掲示物等を全部英語の地図や掛け図にし、また、姉妹校交流コーナーを設け、児童が英語を身近に感じ、慣れ親しむことができる環境作りを心がけている。

(2) 姉妹校交流

ー 昨年より、姉妹都市であるアメリカ・イリノイ州ブルーミントン・ノーマル市 Metcalf 小学校との交流を開始した。現在5・6年生を中心に、全校児童の作品や手紙、写真等の交流を行っているが、近い将来個人レベルで、Eメール等の交流に進んでいくことを期待している。

送られてきた作品や手紙は、英語活動室に展示し、児童がいつでも自由に見ることができるようにしている。さらに、手紙等は、英語活動ボランティアティーチャーに内容を紹介していただいた後、各学級に掲示している。

(3) 外国人学校視察訪問の積極的な受け入れ

今年度、フルブライトメモリアル基金の依頼を受け、米国教育者の学校視察（24名）やエジプトから「カリキュラム開発」に携わっている教育関係者（6名）を受け入れ、英語活動の公開や児童との交流を行った。いつも顔を合わせているALTやゲストティーチャーとは違う来校者に、児童は生き生きと交流の時間を楽しんでいた。

さらに、B-SLIMの提唱者であるO.Bilash博士を2度（2003.9及び2004.2）学校に迎え授業研究会を行った。博士から、本校の英語活動の取組、児童が生き生きと英語活動に取り組んでいる様子、そしてB-SLIMの先生方への浸透度について大変高い評価をいただいた。研究・実践の方法や方向が誤っていないことを教職員一同再確認することができた。

4 おわりに

実質3年間にわたる研究をまとめるにあたり、次年度以降へ向けて、成果と課題を明確にすることができた。現在、小学校における英語活動は、総合的な学習の

時間のねらいに基づく「英語活動」と近い将来を見据えた教科としての「英語科」という大きな二つの流れの中で、はっきりとした方向性や展望を描けない中で取り組まれている学校が多いという。そのような状況の中で、本校は、現学習指導要領における総合的な学習の時間のねらいに沿った質の高い実践を蓄積してきたが、今後「教科としての英語科」も視野に入れながら、更に研究を深めていきたいと考えている。

4.1 成果と課題

本校の英語活動に B-SLIM の考え方や「調べ学習」を取り入れることで、以下の成果を得ることができた。

(1)本校教師全員が、英語活動に関わろうとする積極的な姿勢を持ち、B-SLIM に基づいた英語活動を行うことが可能になった。ALT との TT においても、HRT が可能な限り英語で指示を出し、授業をコントロールする場面を多く目にする事ができた。

(2)開発した教材を蓄積し、誰でも使用することができるため、教材開発や準備のための時間を大幅に短縮することができた。また、繰り返し使いながら改善を加えているために、教材の質が向上し、内容も充実してきている。

(3)使用しやすい「ノングレードカリキュラム」を目指し、実践をもとに加除修正を重ねることで、内容が充実してきている。児童の使いたい英語をもとに構成する英語活動が軌道に乗り、全ての学年で、質の高い英語活動を展開することができた。また、「スタディメモリアル」や実践の記録等の交流・活用により学年の引き継ぎがスムーズに進み、系統的な指導を行うことができた。

(4)児童の自己評価を総合すると、常時 90% 以上の児童が「わかった」「楽しく活動ができた」と評価をしている。また、授業のはじめや終わりの挨拶、朝の会等学校生活の様々な場面で英語を使う機会が増え、私たちの願う「楽しく英語を身に付ける」「英語嫌いをつくらない」が着々と実現に向かっている。

今後克服していかなければならない課題は次の 2 点である。

(1) 英語に初めて触れる小学生に対して、可能な限り native な音を提供する必要がある。これまで同様 B-SLIM の理論を研究することの他に、英語活動に携わる教師個々の英語力を高めていくための研修の機会や方法を具体的に考えていかなければならない。

(2) 現 5 年生は、4 月の段階で全てのコースの学習を終えていることから、現在の「ノングレードカリキュラム」

の basic/advanced の両コースに brush up コース（仮称：文・文型を中心とするコース）を新たに設け，再編成を進めていく必要がある。

また一方で，将来，教科としての側面が重視されていくことも視野に入れながら，カリキュラム研究や textbook の編集等にも着手しなければならない。

4.2 研究を終えて

最後に，本研究に協力いただいた方々に感謝を申し上げます。特に研究の細部にわたりご指導いただいた小池生夫先生，二度にわたり本校を訪問し適切な指導をいただいた Olenka Bilash 博士，北海道立教育研究所の渡部道博・瀧澤義守両先生，カナダ・アルバータ州立大学で B-SLIM を共に学び，北海道各地でこの指導方法を実践している HTEP（Hokkaido Teachers English Project）及びアンケートや模擬授業でお世話になった AEEN（Asahikawa English Education Network）の先生方には，心よりお礼を申し上げます。

参考文献

植松茂男.(2003).『第二言語習得理論の児童英語教育への示唆』.大阪.日本児童英語教育学会第24回全国大会資料集
 樋口忠彦.(2003).『児童が生き生き動く英語活動の進め方』東京.教育出版.
 文部科学省.(2001).『小学校英語活動実践の手引』.東京.開隆堂
 北海道立教育研究所.(2003).『「総合的な学習の時間」における小学校英語活動の手引き：ハローイングリッシュ』.北海道.北海道立教育研究所資料1

Bilash's Input-Intake-Output-Evaluation
Second Language Instructional Model

